

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00035

研究課題名（和文）質料的(非)現象学という観点からの西田・田辺哲学とフランス現象学の交差的研究

研究課題名（英文）An intersectional study of philosophy of Nishida and Tanabe and French phenomenology from the perspective of hyletic (non-)phenomenology.

研究代表者

杉村 靖彦 (Sugimura, Yasuhiko)

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：20303795

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：「質料的(非)現象学」という視座から西田や田辺の哲学全体の捉え方を刷新し、同時にこの視座を媒介として、レヴィナスやデリダ、アンリといったポストハイデガー的フランス哲学とのあいだに種々の交差可能性を切り開くことができた。そして、その成果を日仏両語で発表すると共に、その全体像をフランス語著作(Temoignage et eveil de soi. Pour une autre philosophie de la religion, Paris, PUF,2023)として刊行した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

自己と他者、認識と行為、生と死、身体と言葉といった問題系は、従来の現象学でも京都学派の哲学でも繰り返し論じられてきたが、それらを「原 質料性」という視点から新たに連関づけ直し、関与する主要な哲学者たちを再配置できる構図を提示した。それによって、西洋哲学とは異質視されることの多い京都学派の哲学についても、奇矯な諸概念により独特の難解さをもつハイデガー以後のフランス哲学についても、それらを論じる際のプラットフォーム自体を刷新するような創造的かつ統一的な描像を提供し、この分野での今後の研究の転換と発展の礎を形成した。

研究成果の概要（英文）：From the perspective of "hyletic (non-)phenomenology", this research renewed totally understanding Nishida's and Tanabe's philosophy, and through the same perspective, opened up various possibilities of intersection with the post-Heideggerian current of French philosophy, represented by Levinas, Derrida and Henry. After the results were presented in French and Japanese, the whole work was published in French (Temoignage et eveil de soi. Pour une autre philosophie de la religion, Paris, PUF,2023).

研究分野：宗教哲学、現代フランス哲学、京都学派の哲学

キーワード：京都学派の哲学 現代フランス哲学 原 質料性 西田幾多郎 田辺元 エマニュエル・レヴィナス ジャック・デリダ ミシェル・アンリ

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

近年、西田や田辺の哲学、および京都学派の哲学をめぐる研究は、かつては想像できなかったような種々の新たな展開を経て、国内のみならず国外でも大変な活況を呈してきた。西田や田辺だけをとってみても、その思索世界を「自覚」や「絶対無」といった中心概念へと集約して本質化し、そこに東洋の伝統の精髓を見ようとするような解釈は後景に退き、それに代わって、個別の興味深い主題を切り出して今日の哲学的議論に接続したり、ある時期に限定して精緻な文献的研究を展開したり、思想的・比較思想的な位置づけをさまざまなスケールで行ったりといった、多種多様なアプローチが並び立つようになってきた。

このことは、一面では、京都学派の哲学が歴史的な距離をもって扱われる対象になったことに加えて、日本語文脈を超えて「世界哲学のフォーラム」(J.W.ハイジック)の共有財となりつつある状況を反映する事態であり、それ自体はたいへん喜ばしいことではある。だが他方で、こうした局面では、研究の裾野が広がる分、個々の研究が断片的で恣意的なものとなり、多様性の中へと拡散してしまう恐れがあることも事実である。それゆえ、この新たな状況が可能にしたさまざまなアプローチを受けとめた上で、それらを西田や田辺の哲学「全体」へとフィードバックし、その全体像を従来とは別の仕方でも描き直す必要がある。そうした新たな総合の努力なしには、京都学派の哲学は新たな話題の供給元として消費されてしまいかねないのではないか。本研究の開始時において、研究代表者を動機づけていたのはそのような問題意識であった。

2. 研究の目的

本研究が全体として追究しようとしたのは、今日に至る哲学的問題状況の展開、および京都学派の哲学の研究の変遷を踏まえた上で、西田と田辺の「絶対無」の哲学を新たな視点から意義ある仕方でも位置づけ直すことであった。そのための特権的な視座として採用したのが「原質料性」という主題である。彼らの絶対無概念は、同時代のフッサールやハイデガーの現象学と「事象そのものへ」という根本動向を共有しつつ、それを彼ら以上に徹底することで形成された。その際に西田と田辺の双方が参照したのが、プラトンの「コーラ」、すなわち「イデアを受けとる場」として、後の哲学史における「第一質料」の起点となった概念である。従来、このことの意味は十分に問われてこなかったが、現象学と共有する「事象そのものへ」の道の究極において現象学の枠を内破し、「原質料性」を根底的な事象と見なすに至ったという点で、「質料的(非)現象学」と形容することができるのではないかと。

以上のような観点から、本研究は次の四つを目的として設定した。

西田と田辺による二つの「絶対無」の哲学の形成と展開を「質料的(非)現象学」という視座から辿り直すことで、それらの内在的理解、および両哲学の関係についての理解を刷新する。

の作業をもとに、西田と田辺の哲学に関して、現代の問題関心から個別的に扱われがちであった身体論、社会存在論、歴史世界論、制作表現論といった諸領域での各々の独創的な諸概念を、彼らの「質料的(非)現象学」の多様な展開として相互連関的に理解する。それを通して、西田と田辺の哲学の全体像を新たな仕方でも描き直す。

本研究が採る「質料的(非)現象学」という視座自体は、フッサールやハイデガーの批判的受容を通して独特の展開を遂げた20世紀後半以降のフランス現象学の流れを主たる導きとして得られたものである。レヴィナス、アンリ、デリダ等に代表されるこれらの多様な思索を「質料的(非)現象学」という思考様式へと凝集させた上で、それが今日の問題意識とどう結びついていくかを吟味解明する。

の作業をもとに、20世紀後半以降のフランス現象学の流れから引き出される「原質料性」論の諸展開を、「質料的(非)現象学」という視座から辿り直された西田・田辺哲学と交差させ、双方を並行的に考究していく。それによって、西田・田辺哲学を現在の思想状況へと引き入れ、その今日的諸可能性を引き出していく。

3. 研究の方法

「コーラ」と「絶対無」 西田・田辺のテキスト内在的研究

プラトンの「コーラ」に関して、西田は「無の鏡」のごとく全てをそのままに映す「絶対無の場所」として、田辺は「狂瀾怒涛の大海」のごとくたえず転換媒介する「絶対無の渦動」として描き直している。「コーラ」に対する西田・田辺の絶対無概念のこのような関係について、テキスト内在的に精査し、それを元に、両者の絶対無概念とその緊張的関係を、「原質料性」という主題の下で再解釈することを試みた。

レヴィナス、アンリ、デリダにおける「原質料性」 フランス現象学の並行的研究

レヴィナスの「存在者なき存在」としての「イリヤ(ある)」概念とアンリの「質料的現象学」は、それぞれ独自の仕方でも、「コーラ」を発端とする「原質料性」という主題に直結している。

また後期のデリダは、コーラ概念自体に特異な解釈を施し、自らの哲学の核心的表現へと仕立て上げる。彼ら以後のフランス現象学者たちも含めて、こうした類の考察を系統的に取りまとめ、それらが形成する布置を描き出す。また、この構図の中で、彼らそれぞれにおける質料的次元に関わる諸主題（身体、感情、生、出来事、歴史等々）を精査し、を踏まえて西田・田辺哲学との突き合わせを図った。

身体性・偶然性・歴史性 西田・田辺哲学の「原 質料論」的再考察

この成果を元に、西田・田辺哲学について、とくに後期西田の「歴史的世界」論と中期田辺の「種の論理」を核に、身体性、偶然性、歴史性といった主題に焦点を当てて「原 質料論」からの読み直しを進めた。それによって、「歴史的身体」（西田）や「質料の種性」（田辺）といった特徴的な概念が、彼らの絶対無概念のポテンシャルの表現でもあることを示そうとした。

「質料的(非)現象学」の今日的意義 西田・田辺哲学とフランス現象学の交差的研究

この成果から の作業へと立ち戻り、「質料的(非)現象学」の視座からの西田・田辺哲学とフランス現象学の交差的研究を進める。とくに「行為」という主題を基軸とし、共同行為（プラクシス）と制作行為（ポイエシス）をめぐる諸問題との関連づけを図った。

4. 研究成果

「質料的(非)現象学」という視座から西田や田辺の哲学全体の捉え方を刷新し、同時にこの視座を媒介として、レヴィナスやデリダ、アンリといったポストハイデガース的フランス哲学とのあいだに種々の交差可能性を切り開こうとする本研究の企ては、各論においてはもとより、全体として総合的な成果に到達することができた。その全体像は、2022年3月にパリカトリック大学のエチエンヌ・ジルソン講座の担当者として行った6回の講義で提示され、それをさらに彫琢して2023年7月に刊行した仏語著作（*Témoignage et éveil de soi. Pour une autre philosophie de la religion*, Paris, PUF）にまとめることができた。そこでは、ハイデガーが現象学の独自の展開を元に展開する「哲学の終わり」に面した思索を参照点として、上記の現代フランス哲学を「ポスト哲学的」、西田や田辺らの京都学派の哲学を「準 哲学的」と特徴づけた上で、双方の方法態度をそれぞれ「証言」と「自覚」を核にまとめ上げた。そして、この全体的な構図の中に「質料的(非)現象学」という視座を組み込んで縦横に展開することによって、(1)西田や田辺の絶対無の哲学の新たな描像のフランス語による提示とフランス哲学の議論空間への挿入、(2)ポストハイデガース的フランス現象学の種々の展開に関する新たな視点からの創造的解釈のいずれにおいても、前例のほとんどない大きな成果をあげることができた。自己と他者、認識と行為、生と死、身体と言葉といった問題系は、従来の現象学でも京都学派の哲学でも繰り返し論じられてきたが、それらを「原 質料性」という視点から新たに関連づけ直し、関与する主要な哲学者たちを再配置できるプラットフォームを著作レベルで提示したことの意義は大きい。フランス語圏での反響も拡大しつつあり、その後の半年のあいだにも、二度フランスでの国際研究集会に招待され、この著作の続編となる発表を行っている。

西田や田辺の哲学の新たな総合的解釈をフランス哲学研究との交差の中で企てる本研究は、当初の予定では、定期的に日仏双方で対面による研究集会を組織し、そこでの反響や批判などをフィードバックしながら進めていくつもりであった。しかし、新型コロナの時期に重なったため、そのような進め方は4年間のうちの3年間はほぼ不可能になった。その間、オンライン会議や日本在住のフランス語圏研究者たちとの交流を通して、この不足を補うべく努めてきたつもりであるが、そうした双方向的な議論を通してのさらなる展開の余地は残されている。上記の著作をめぐる研究集会の機会を探ることや、その後の展開を国内外で積極的に発信することを通して、この残された課題に取り組んでいきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 杉村 靖彦	4. 巻 15
2. 論文標題 ポスト西谷の宗教哲学へ 西谷宗教哲学の受け取り直しのために	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 文明と哲学	6. 最初と最後の頁 83-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yasuhiko Sugimura	4. 巻 XXI
2. 論文標題 Temoigner apres la fin de la philosophie: L'hermeneutique radicale du temoignage dans la philosophie francaise post-heideggerienne	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 STUDIA PHAENOMENOLOGICA	6. 最初と最後の頁 87-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 6件/うち国際学会 5件）

1. 発表者名 Yasuhiko Sugimura
2. 発表標題 Descente en deca de l'etre. Levinas et Nishida entrecroises
3. 学会等名 Colloque Cerisy: Levinas et Merleau-Ponty. Le corps et le monde (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 杉村靖彦
2. 発表標題 ポスト西谷の宗教哲学へ 西谷宗教哲学の受け取り直しのために
3. 学会等名 日独文化研究所 西田・西谷シンポジウム (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Yasuhiko Sugimura
2. 発表標題 Transplanter la duree pure dans l' Ecole de Kyoto: le cas de NISHITANI Keijii
3. 学会等名 Project Bergson in Japan 2022 Sympoisum: In Search of Time and Free Will (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Yasuhiko Sugimura
2. 発表標題 Transplanter le bergsonisme dans le lieu du neant absolu: Bergson et l' Ecole de Kyoto
3. 学会等名 Fukuoka Meeting of the Global Bergsonism Research Project (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 杉村靖彦
2. 発表標題 懺悔道のポエティクスに向けて - 田辺元『ヴァレリイの芸術哲学』再読
3. 学会等名 国際日本文化研究センター「東アジアにおける哲学の生成と発展 間文化の視点から」第三回共同研究会 (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Yasuhiko Sugimura
2. 発表標題 Je ne suis rien: Le degre zero de l' ipseite ricoeurienne
3. 学会等名 Colloque internationale: Paul Ricoeur, patrimoine mondiale (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 杉村靖彦
2. 発表標題 西谷啓治のベルクソン論 卒論「シェリングの絶対的觀念論とベルグソンの純粹持續」(1924)から
3. 学会等名 日仏哲学会提案型ワークショップ「ベルクソン『試論』の思想史的ポテンシャルを探る」
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 Yasuhiko Sugimura (単著)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 PUF	5. 総ページ数 300
3. 書名 Temoignage et eveil de soi - Pour une autre philosophie de la religion	

1. 著者名 Yasuhiko Sugimura (共著)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Inschibboleth	5. 総ページ数 304
3. 書名 Carla Canullo/ Johann Michel (ed.), Renewing Hermeneutics. Thinking with Paul Ricoeur- Renouveler l'hermeneutique. Penser avec Paul Ricoeur	

1. 著者名 杉村靖彦・渡名喜庸哲・長坂真澄(編)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 417
3. 書名 個と普遍 レヴィナス哲学の新たな広がり	

1. 著者名 杉村靖彦（共著）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 886
3. 書名 廖欽彬,・伊東 貴之・河合 一樹・山村 奨（編） 東アジアにおける哲学の生成と発展 間文化の視点から	

1. 著者名 杉村靖彦・田口茂・竹花洋佑（編）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 388
3. 書名 渦動する象徴 田辺哲学のダイナミズム	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------